
られた大切にして不可欠な存在であり、互いの手を取り合い共に支え合い、約束の未来へと進

新夜 詩希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染……それは綺羅びやかな出逢いと雅で甘美な思い出に染められた大切にして不可欠な存在であり、互いの手を取り合い共に支え合い、約束の未来へと進み苦楽を分け合う掛け替えの無い特別なパートナー……のはず。

【Nコード】

N4563P

【作者名】

新夜 詩希

【あらすじ】

昔々ある所に、それはそれは仲の良い男の子と女の子がおりました。男の子はプロバスケツトボール選手になる夢を、女の子は彼のお嫁さんになる夢を持ち、家族ぐるみで日々健やかに成長して行きました。それから十数年 成長した女の子は男の子の事が大嫌いになっていました。何故なら彼は……何処へ出しても恥ずかしく

ない立派な『 』になっちゃってしまっていたからです！ 新夜詩希
の思い付き短編第…：…何弾だっけ？ 青春コメディ小説。長い夕
イトルはご愛嬌って事で。

【幼き日暮れのプロポーズ】（前書き）

この作品には結構な『偏見』が出て来ます。それに対する罵詈雑言も出て来ます。読んで不快に思う方もいるかも知れません。ご注意下さい。あんまり難しく考えず、肩肘張らずに楽しんで頂けたらば、これ幸いです。

【幼き日暮れのプロポーズ】

『ねえ、りうのこと好き……？』

『よつと。なにいつてんだ、あたりまえだろ！　これからもずーっと、おれがプロのバスケットせんしゅになってもりうとずーっといっしょだ！』

『……………！　うん！　りうもるーくんのことだい好きー！　りう、おっきくなったらるーくんのおよめさんになるの！』

思い出とはかくも美しく暖かく、そして何故こんなにも残酷なものだろうか。しかもそれが印象的であればある程、比例して脳内再生の回数は増えて行き、完全に焼き付いてしまっただけで最早忘れてたくても忘れられない領域へと昇華して体験した自分でさえ手の届かない代物となり、改竄や捏造の余地さえ奪ってしまう。

幼い子供、それこそ一桁程の年齢の子供が発する『結婚しよう』というフレーズにどれだけの意味があるだろう。妙齢の大人が長い恋愛期間の末、緊張と共に囁くその言葉とは覚悟と重みの点で同音異義な程の違いがあるのは分かる。だが思いの強さで言えば全く負けているとは今でも思っていないし、むしろしがらみや打算などがない分、比較にならない程に宝石めいた純粹さを輝かせる。

そう考えればあの日、夕焼けの公園で彼がバスケットリングに鮮やかなジャンプシュートを決めた後に交わした約束は紛れもなく『プロポーズ』だし、本人同士の口約束とは言え明確に覚えている以上、その効力は失われる事はない。強いて言えば、証となる指輪や書類があるかないかの違いくらいだろう。……それがどれ程、今の私に

遺恨している事か。忘れてくても忘れられない、『忘れた』と口に出しても所詮己を欺く事など出来はしない。何故あんな事を口走ったのか。何故あれ程までに純粹だったのか。もしも時を遡れるならあの瞬間の自分の口を塞いで連れ去ってやりたい。

……いや、それは少し違う。何が違うって、あの日あの時あの言葉が発した私は紛れもなく本心を口にしていた。例え『結婚』という言葉にただ甘いだけの響きしか感じていなくても、幼心に『彼と結婚してもいい』と心の底から思ったからこそその発言だった。それだけは認めざるを得ない。あの頃の感情を文言するなら、それは単純明快なまでに『恋』。彼はあの頃の私にとって世界一大切な人だったのだから。

思い出自体は綺麗なものだ。今はどう思っていようが、あの輝かしくも暖かく、こそばゆくて甘酸っぱく、一片の曇りもない宝石みたいな『初恋』の記憶は、私という人物を形作る上で欠かせない重要なピースである事は間違いないし、誰か別の第三者に穢されるのは我慢ならない。では一体、何が変わってしまったのか。何があの頃とは同じでないのか。

時も人も、移ろい往くものだ。決してひとところには留まれない。流れ流され、刻一刻と色を変え形を変えて世界を巡り、成長・成熟・精錬を繰り返して行く。それが思春期の子供ならば尚の事。……そう、実に単純な話だ。あの頃の彼と私は、もうここにはいない。全てが変わり過ぎていて、その変化が劇的過ぎていて、同じ気持ちを持ち続ける事が出来なくなつた。たつたそれだけの事だ。

「オウフｗｗｗｗあ にゃんぺロぺロｗｗｗｗデユクシｗｗ
ｗｗｗｗ」

……そうなのだ。十数年の歳月を経た彼は何をどう間違えたのか、見た目から中身から何処に出しても恥ずかしくない程に完璧な『オタク』になってしまっていたのだ

【朝露煌めくディプレッション】

静謐。明鏡止水。穏やかに、けれど極限まで神経を研ぎ澄まし、雑念・雑音を小さく小さく折り畳んで体内の一点に集中する。見据える先は28mの距離にある僅か一尺二寸の円形。的の真中、白の点。

「……………ふっ……………」

的から視線を逸らさずに、短く息を吐く。精神集中、それをもう一段階上に引き上げる為の儀式。排除する為に掻き集めた雑念を吐き出す所作。射の動作に入る前の私の癖だ。この仕草を以て、私は弓と一体になり射を行う為の最適な身体に切り替わる。

足踏み、胴造り、弓構え、打起こしから引分けへ。射法八節を踏襲し、一連の動作を淀みなく組み上げる。この道場に通うようになった8年前から、万を超える回数をこなして来た動作。そこに不自然さや違和感など何も無い。

「……………」

変わったのは精神の方か。出し尽くした筈の雑念が再び首を擡もたげる。会に至るその刹那、28m先の的にある見知った顔が映り出した。数年前から、まるでトラウマのように浮かび上がる丸い顔。引分けまでを終え、いざ会に至ろうとするその瞬間に発生するトラウマ。無論、実際に落書きが書いてある訳ではない。それは私の精

神が見せている幻影なのは明白。……だがどうにも消えてくれないし、引分けを行った状態では目を逸らす事も出来ない。

「……………ちっ」

礼節を弁えない舌打ち。溢れ出す雑念……というより、怒り。あの顔を見ているだけでムカムカする。他に人がいる時や大会時は流石に自重するが、朝練で道場に私一人しかない時は遠慮なく打つ事になっている。そしてその勢いで会を成す。やっぱりストレスの貯め過ぎって身体に悪いと思うんですよ、ハイ。

「……………。死ね」

ぼそりと発した物騒な言葉と共に、引き絞った弓から矢を解き放つ。離れ。矢を引き絞っていた右手は肘を固定している為、殆ど動かない。代わりに弓を持つ左手が僅かに下がり、矢の行方を見守る為はその道筋を空ける。

ヒュン、という幽かな風切り音。引力に反発し地面とほぼ平行の軌跡を描いて、矢は的に中る。中心点・正鵠せいこくよりもやや上、浮かんだ顔のちょうど眉間を打ち抜いた格好だ。その中り矢を以て、憎々しいトラウマ顔は掻き消える。

「……………やっぱり怒りが原動力じゃダメか。正射必中には程遠いわ」

残心もそこそこに、溜息混じりで自らの射を省みる。一応二手四射は皆中。つまり四本放って全部的に命中したって事だ。その程度はまあ……私の実力からすれば普通と言った所。でもその四射全てが微妙に狙いを外している。こんな事がここ数年、ずっと続いている。アイツの顔が的に浮かぶようになってから、中りは劇的に増えたが微調整が出来なくなつた。

「うん、今日はこんなもんかな。大会は今週末か……。それまでにはもうちょっと調整しないと……」

私は『桜木 梨羽』、17歳。近所の学校に通う至って普通の高校3年生……。とは言い難く、自分の家の真向かいにある『林原弓道場』で弓を習い始めて早8年、大会に出れば全国でも少しは知られる存在になる迄に上達してしまった。元々はここまで入れ込む気ではなかったのだけど、まあ弓を引くのは楽しいからその辺は結果オーライ。

ポニーテールに纏めていた長い黒髪を解いて胸当てを外し、手早く後片付けを開始する。……この長い髪と佇まいから『大和撫子』だの『美少女弓道家』なんて見出しで知らない内に雑誌に載っちゃったりなんかするんだけど、射以外の所で注目を浴びてもねえ……。そりゃ私だって女の子ですし、褒められれば嬉しいんだけど……。何か釈然としない蟠りが残る。

「ん……。つと。さて」

一頻りの片付けを終え、朝露で輝く射場の草木を眺めつつ爽やかな気分で身体を伸ばす。服装は既に高校の制服だ。朝練はあくまで朝練、これから女子高生の本分である学校の授業がある。……。なーんて、そんな殊勝な心掛けではないにしろ、学校は学校で楽しいし友達もいるし、別段サボる必要もない。荷物一式を持ち上げた所で、道場に響く一つの声。

「お早う、梨羽ちゃん。今日も頑張ってるわね」

この林原弓道場の師範代であり私の師匠であり、そして幼馴染の母親である『林原 あかり』さんだ。おばちゃん化が激しい私のお

母さんと2つ3つしか違わない筈だけど、凄く若々しくて羨ましくなる。勿論射の腕前は一流だし、優しくてその上料理も上手、と。……まあ長く接しているだけに短所も知っているけど、その辺は割愛って事で。

「あ、おばさん、お早う。いつもゴメンなさい、使わせてもらっちゃって」

「ふふふ……いいのよ。今更遠慮なんてするんじゃないの。それよりそろそろ朝ご飯よ。早くいらっしやい」

「はい」

私は毎朝、朝練の後にこちらの家で朝食を戴いている。家は両親が共働きでしかも夜勤・早番などが入り乱れて家族の時間帯が安定しない為、朝食だけはこちらの家で食べさせてもらっている。あかりさんは私の家の事情も知っているから、好意に甘えている内にいつの間にか習慣化してしまったという訳だ。

弓道教室は夜間週二回。私も元々はそのあかりさんが教えている教室に通っていたが、高校の弓道部に所属するようになってからはそちらの練習に重きを置いている。その代わり、と言っては何れでも、朝早くの誰もいないこの時間を掃除と的貼り替えと貸出道具のメンテ+ を条件に貸して貰える事になった。早起きは結構大変だけど、一人で集中して練習出来てしかも朝食まで付けてくれるなんて私にとっては至れり尽くせり。そりゃあ上達もするってものです。……まあ、完全に良い事ばかりって訳ではないのだけど……。

先行するあかりさんは振り返り、さも申し訳なさそうに口を開く。

「……………それじゃ、今日もお願いね」

「……………はい」

これがプラスアルファの条件。朝の清々しい気分が一気に吹き飛び、陰鬱にさえ反転する。激しく気乗りしないけど、最早『作業』と割り切って事に臨む。あかりさんと別れ、道場がある離れから少し遠回りして階段を上る。2階の一番手前の部屋。ここに私の気分を落ち込ませる元凶が住まう異次元が存在するのだ。

「……………」

ドアノブに手を掛けて、一瞬躊躇する。ああ……………今日もまたあのおぞましい異空間に入らなければならないのか……………。この作業は数年前からほぼ毎日続けていて昔は楽しい事の一つだったのに、今では苦痛の事の最たるもの一つになってしまった。出来れば放棄したい。でも毎朝道場を貸して貰い朝ご飯を食べさせてくれるあかりさんと義雄おんさんに報いなければ、申し訳が立たない。『この』二人は本当にいい人達なのだ。あ、義雄さんはあかりさんの夫で、この家のお父さんね。至って普通のサラリーマン。

「……………さて」

早くしなければ朝ご飯を食べる時間がなくなる。『ヤツ』に付き合って遅刻なんてまっぴら御免だ。深呼吸して射を行うのと同じくらしいの気合を入れ直す。そうでもしないと取り込まれてしまつかも知れないのだ。

私は意を決して、異空間へと足を踏み入れた

【混沌盈るアナザーワールド】

「んでwwwんでwwwんでwwwにゃーんでwww」

「……………」

ドアを開けた途端に溢れ出す毒電波。絡み付くように甘ったるく甲高い歌声。深い意味なんてなさそうな歌詞。無駄にふわふわでキラキラな音の洪水。詳細は分からない……というより分かりたくないが、所謂『アニメソング』という類の曲。それが爆音でこの異空間に響き渡っている。

それだけならまだしも、目の前にある醜悪な『物体』はその脳みそが蕩けそうな曲に、自らの濁声をさも嬉しそうに掛けていらっしやる。ステレオで時間設定した目覚まし代わりにCDを流して、目が覚めた瞬間条件反射のように歌い出すのだとか。……………何このキモ生物。

「おおwww梨羽殿www毎朝大義でござるwwwドウフwww
www」

「……………」

見渡すのも躊躇われる、色とりどりの髪の色と造形があまりにもオカシイ衣装に身を包んだ可愛らしく微笑む女の子（アニメか何かのキャラクター）のポスターやら人形やら各種グッズで部屋中を埋め尽くし、自身も実にきわどい格好の女の子っぽい絵柄がプリントされている抱き枕にスリスリしている部屋主。彼は『林原 琉依』

17歳。私の幼馴染であり、今も同じ高校に通うクラスメイト。…そして、何を隠そう幼き日に結婚の約束をした、あの『るーくん』その人なのである。

だらしなく肥えた腹、お菓子ばかり食べている事による顔中のニキビ、手入れする気もなさそうなボサボサの髪など、見た目完全にテンプレ的『オタク』。プロバスケット選手を目指していて、それに違わぬ運動能力と爽やかな笑顔でクラスの女の子の憧れの的だったあの思い出の中の彼とは似ても似つかぬ今の琉依。正に『どうしてこうなった』という言葉が何の違和感もなく頭に浮かぶ。

「デユフィノプウウウウ今日もアニソンまみれの朝でござるウウウ清々しいでござるウウウせーいぞーんせんりやくーーっウウウウ」

「……………」

普通にイラツとする。片や目の前の肉塊は朝も早よから実に楽しそう。オタクってのはもっと奥ゆかしいものだった気がするのだが。もう人目とか世間体とか私とか人として大事なものを一切無視してノリノリである。ここまで来ればいつそ清々しい。コイツが私の幼馴染でなければ、ガン無視決め込んでいる事請け合いなのだが、そうも行かないのが世の中のものなのだ。沸々と湧き上がる殺意を隠しもせず、私は作業を遂行する。

「あああああもうっ！！ 朝からウザいわね相変わらずっ！！ 暑苦しいのよキモイのよ！！ 起きてるなら私が起こしに来る前に降りて来なさいよ！！ そうすりゃわざわざこんな異空間に入らずに済むのに！！」

「クポオウウウ朝から騒がしいでござるな梨羽殿ウウウもしゃアノ

日でござるか？ デュクシｗｗｗｗちょーしに乗っちゃダメーｗｗｗｗ
ｗｗ」

「うがあああああ！ もうほんつつつとイヤ！ さっさと降りて来ないと的に縛り付けて私の射で穴だらけにするわよ！！」

「デュフフｗｗｗｗサーセンｗｗｗｗ」

「だからそれは何語なのよっ！！ 謝る気ないでしょアンタ！！
とにかく、責任は果たしたからねっ！！ 後は勝手になさい！！」

ドアを破壊せんが勢いで叩き閉め、一応義務を果たした私は魔窟を後にする。ついでに私のキャラもかなり崩壊気味だが、アイツと関わる時は仕方がない。……私はそんな凶暴な性格じゃないですよ？ ホントですよ？ 一応学校でも『成績優秀で優しく清楚な桜木先輩』で通ってるんですから。そう、全てはあのオタクブタの所為なのですっ！！ 私は悪くないのですっ！！ そこっ、責任転嫁とかゆーな！！

……昔はこうじゃなかったんだけどなあ……。いつから関係がおかしくなって、アイツはあんな風になっちゃってしまっただろうか……って、実は原因を知っている。そりゃ曲がりなりにも幼馴染で、今はアレだけどずっと一緒に過ごして来たんだから。知りたくなくても知ってしまう。

それは3年前の中学3年の夏。琉依は大好きなバスケットボールが出来なくなつた。練習のし過ぎで利き腕の右肘を壊したのだ。剥離した肘の骨の欠片が神経を傷付けてしまったらしく、アイツは今でも肘を伸ばす度に表情を歪める。その怪我が原因で中学最後の大会にも出れず、自身は勿論、将来を囑望されていた琉依の故障は周囲にも大きなショックを与えた。

そしてアイツは……全てを諦めてしまった。私の声さえ聞かず、自暴自棄になり、全てを拒絶し大切だった筈のものをさえ投げ出して、自分の殻に閉じ籠ってしまった。

……その時にハマッてしまったのが、『アニメ』を筆頭とした二次元の世界。現実逃避するには格好のコンテンツだったとは言え、所謂サブカルチャー産業に手を出した琉依は怪我をしてから数ヶ月足らずで誰から見ても分かりやすい立派な『オタク』へと転身を遂げたのだった。元々前向きで熱中しやすい性格が裏目に出たようだ。自室に引き籠もり、お菓子を食べながらアニメやゲーム、マンガ三昧。確かに怪我をした当初の、あの全てを憎んでいるような殺伐とした雰囲気はなくなった。なくなったのだけど……私から言わせれば、あんな風になってしまった琉依は正直見たくなかった。

私がつきつきりで彼を更正させていれば、少しは違ったかも……と今更悔やんでも仕方がないけど……いや、まあ、私も私で思春期の悩みだとか女子間のしがらみ（ヒント：バスケをやっていた頃の琉依はモテモテだった）だとか色々あったもので、『るーくんも辛いだろうし、今はそっとしといてあげよう』とか体の良い放置をってしまった訳でして、はい。……こんな風になってしまう事が分かっていたなら、そんな余計なものは全てうっちゃってでも琉依の傍にいたものを。気が付いた時には既に遅く、もう手の施しようがない迄に変わってしまった。開口一番、

『長 は拙者の嫁wwwデクシwww』

とか言われた時は全く理解出来ずに一体何の病気かと頭の中が真っ白になった事を覚えている。……未だに琉依の喋る言葉は何かの暗号かと思えないけど。

かくして琉依は推薦入学が決まっていた高校が怪我の所為で破談になり、今は私と同じ地元の公立校に通っている。私は弓道場に通

っている事もあり結局『幼馴染』という立場を無視する事も出来ず、あかりさん達に頼まれるがまま今もこうやって毎朝練習後に琉依を叩き起こす生活を続けていた。……あ、正確には私が起こす前に起きているから私が起こしている訳じゃないけど。

昔、琉依が変わる前まではあかりさん達に頼まれるまでもなく毎朝自主的に琉依を起こしに来たものだ。そりゃ……家は近くだし同じ学校に通ってるんだし、結局一緒に学校行くんだし。それに……琉依の寝顔が……まあ……その……。あ、でも今は気持ち悪いの1フレーズしか浮かばないけどね。

……そう、何が嫌って、私は『オタク』という生き物が心底嫌いなのだ。ああやって性格が変わって罵詈雑言を怒鳴り散らしてしまう程に。アレが『結婚の約束までした大好きな幼馴染のるーくん』であるという事実を目を覆いたくなる。到底理解出来ないし、理解しようとも思わない。いくら相手が琉依とは言え、否、相手が琉依だからこそ許せない。私の運命の人は、問答無用でカッコイイ王子様であるべきなのだ。……何処かの『付き合っていないけど付き合ってるようにしか見えない幼馴染カップル』とは大違いだなあ……。作者……もとい、世の中って理不尽。

そんなこんなで、今日もいつもと変わらぬ一日が始まった

【悲嘆渦巻くブレイクファースト】

「おお、お早う梨羽ちゃん。今日も朝練頑張っていたようだね」

「あ、お早うおじさん。毎朝騒がしくってゴメンなさい」

「ははは、いいんだよ。梨羽ちゃんだって僕の娘みたいなものなんだから。遠慮なんてするもんじゃない」

「ふふふ……貴方はいつも梨羽ちゃんには甘いんだから。娘を産んであげられなくてスミマセンでしたねー」

「そ、そんな事言っていないじゃないか。全く、母さんは何年その事で責めれば気が済むんだろっつねえ……」

「あははっ、仲のいい証拠じゃない。あ、私も手伝うよ、おばさん」

「いいから座ってお父さんの相手でもしてなさい。あとは並べるだけですからねー」

「はい。朝練したらお腹減っちゃった」

「朝から元気いいね。母さんの料理が美味いからって食べ過ぎると太るよ」

「おじさんっ、女の子にそんな事言ったらホントなら嫌われちゃうんだからねっ?」

「ははは、スマンスマン。梨羽ちゃんに嫌われてはショックで寝込

む事に……」

「ドゥフフｗｗｗｗキタコレｗｗｗｗネ申スレに遭遇してしまったと言わざるを得ないでござるｗｗｗｗ>>1乙ｗｗｗｗコポオｗｗｗｗ」

『……………』

朝食の時間を迎える林原家のダイニング。爽やかで微笑ましい家族の会話（私は実子じゃないけど）を展開しているにも拘らず、それを携帯眺めてニヤニヤしながら独り言を呟いている一体の巨オタがブチ壊す。空気ブレイカーのスキルは日本有数かも。

いつも通りの朝食を開始したはいいいけれど、林原夫婦と会話するのは専らご近所さんの私で、当の息子は会話に参加どころか携帯を注視しているだけで目を合わせもしない。それだけならまだしも、変な独り言で空気を破壊に掛かったりもする。これならいつそ居ない方が気楽なだけ……自分の家でもないのにそんな事を申言出来るほど偉くなった覚えはない。

「フォカヌポウｗｗｗｗ拙者は激しくzipを所望でござるｗｗｗｗ」

だから何語だそれは。知り合いにこんな異次元言語使いはいない筈なただけ。

「みｗｗｗｗなｗｗｗｗぎｗｗｗｗつｗｗｗｗてｗｗｗｗ来ｗｗｗｗたｗｗｗｗ」

もうツッコミ入れるのもバカらしい。いつそ本当に射的にでも

括りつけてしまおうか。二丁三射撃ち込んでジェノサイドしてみたら、むしろそこから脳がクラッシュのち初期化して正気に戻るかも知れないし。……うん、試す価値はあるかも。

などと声に出さず物騒な計画を立てていると……

「ああああああっ！！ 何でこんなキモイ子に育っちゃったのかしらあああ！？ 私の育て方が悪かったのかしらあああ！？」

これまたいつもの病気が始まった。題して『息子の莫迦さ加減を呪う狂気の母親症候群《ママンクレイジーシンドローム》』。あかりさんがこの小説の不条理……もとい、二次元にドハマリしあつちの世界から帰って来ないバカ息子のキモグロぶりを嘆き憂いて発狂してしまう、1日に数回の頻度で発作を起こす謎の奇病である。回復の兆しは今の所ない。まあ病原も回復法も分かり切ってはいる訳だけど。自分の息子をキモイ呼ばわりとか流石にどうかとも思うが、これがまたガツツリ同意出来てしまうから始末が悪い。あ、育て方云々はあかりさんに責任ないと思うよ、うん。

「昔はあんなに可愛かったのにいいいい！！ こんなキモくちや梨羽ちゃんのお嬢さんに相応しくないじゃないのおおおおおお！！」

同じテンションでさめざめと泣き崩れるキモオタの母。ご安心召されい、こんなのを嬢に貰う気は毛頭御座いませぬ。

「ばいばいばいばいびー……！！ アンタ して私も ぬう……………！！！！」

「オウフｗｗｗｗ今日も母上は荒振ってござるなｗｗｗｗ鷹でござるかｗｗｗｗ？ 鷹でござるかｗｗｗｗ？」

私のキャラ崩壊も結構なはずだけど、この御方には敵わない。若々しくて家事も上手く、射も一流と非の打ち所がないかのように思われていたあかりさんにも、かような欠点が存在するという有り難いお話。取り敢えず、そのフレーズはマズイと思いますよ、あかりさん。

「はっはっは、今日も朝から二人とも元気がいいなあ。会社勤めでストレス満載の僕としては羨ましい限りだよ。少しその元気を分けて欲しいくらいだ」

ものつそい他人事のように、目玉焼きを食べながら義雄さんのんびりと発言する。目玉焼きに梅ドレッシングという通なんだか味覚障害なんだか分からない食べ方で、優雅に朝食を嗜んでいらつしやっていた。……この人の動じなさもかなりのものだ。最早達観の領域だろう。

「……………。んまあ、いつもの事ではあるけど。いい加減頃合い見計らって何とかしないと不味くない？ おばさん、その内自我崩壊しかなないんじゃないか……………」

「大丈夫大丈夫、母さんのヒステリーは今に始まった事じゃないしね。生理現象みたいなものだよ。山を越えれば落ち着く。そして何より、観てて面白いじゃないか。止めるなんて勿体無い」

あっはっはー、と快活に笑う中年タヌキ。そのおおらかな性格と意外な……と言えば失礼だけど、卒のない仕事ぶりです会社では管理職として一目置かれているらしい。この人達の馴れ染めってどんなんだろうか。凄く興味があるけど、未だに訊いた事がない。あのおばさんとこのおじさんの事だ、きつと一癖も二癖も、もしかしたら異世界冒険譚辺りにまで発展しそうな程面白い馴れ染めに違いない。

今度折を見て根掘り葉掘り訊き出してやるつと。

「ええ……そりゃあ逢いたくて逢いたくて震えるつてなもんよ……。タマシイぐらいレポリューションしちゃうわよ……。そうでしょう？　だって魔法の言葉で楽しい仲間がぼぼぼーんだもの……。ムスコでしょうか？　いいえ、ヲタクです。……ブツブツ……ガガ様ブラボー……」

「又ポオwwwこれまた良スレでござるwwwこれは全力で保守せねばwww」

「ご馳走様でした。おじさーん、私今日日直でもう出なくちゃいけないから、片付け頼んでもいいー？」

「了解。行ってらっしゃい、梨羽ちゃん。勉強頑張っておいでー」

色々とツツコミ所は多いけど、これが私の日常だから仕方がない。さて、今日も一日頑張りますか

【類友集まるクラスルーム】

「おう林原。今日も相変わらずデカキモイなー」

「オウフｗｗｗｗ片瀬氏ｗｗｗｗお主こそ相も変わらぬ辛辣っぷりでござるｗｗｗｗ稀代の人形師の腕も健在でござるかｗｗｗｗ？」

「まあなー。昨日も一体完成させちまったぜ。ふっ、自分のゴッドハンドぶりがあまりにも眩しい……！！」

「おおｗｗｗｗこれは良いセリアたんｗｗｗｗペロペロｗｗｗｗところで片瀬氏、今期は何をチエックしているでござるｗｗｗｗ？」

「クワーゼ、ロウユーぶ、ピンド、およろ辺りは安心のブヒアニメだな。音たん可愛いよ湯たん。あと個人的にはタバニがフィギュアマスターとしての腕を疼かせてくれるってトコか」

「……………」

所変わって、私の通う某県立高校の3年2組。日直として相方と朝の雑務をこなしていた私の耳に届いたのは、異次元の会話だった。始業前の清々しい空気を台無しにするのはキモオタ二名。片方は言わずもがな、もう片方はこのクラスで唯一そのアハウと同等の会話を展開出来る自称『稀代の人形師』『フィギュアマスター』『ゴツドハンド』こと『片瀬信二』。私からすりゃ只のオタクだ。クラスでも爪弾き者……という程ではないが、皆極力関わり合いを避けている感じ。まともに相手をするのはせいぜい一人しかいない。上

記の会話が完全に意味不明だったその貴方、むしろ正常なのでご安心を。

因みにこの片瀬、以前何処かで何かにごちょっとだけ出演経験があるのだが……それはまた別のお話。『何で突然そんな地味な所を……』『時系列的に有り得なくね?』『それだったらメーティを出せ』などのツッコミは受け付けませんので悪しからず。

「……全く、わざわざ教室でする会話じゃないでしょうに。気持ち悪いったらないわ。ああいうアホって一体何考えて生きてるんだろう。せめて目の届かない所でひっそりやってれば関わらなくて済むのに……ブツブツ……」

「……相変わらずうねうね毒吐いてるねー。幼馴染クンがオタ化しちゃった事、未だに根に持つてるんだ?」

「うっさいわね、アンタには関係ないでしょ、ミニ。さっさとそっちの仕事も終わらせてよ」

「はいはーいっと。『成績優秀で優しく清楚な桜木梨羽』が聞いて呆れる毒舌ぶりなこと。ファンのコ達にうっかり暴露してみたいわ」

「ご自由に。そんな事されても痛くも痒くもないから無駄よ」

「そうねー、むしろその隠れDS気質はマニアにとっちゃ褒めたいなもんだからねー。そっち系の新規ファンが急増したりして。うん、それはそれで楽しそう」

「……………はあ」

掲示板のお知らせプリントの張り替えをしながらカラカラと笑う

相方のテキストさ加減に嘆息しつつ、教室の観葉植物への水やりを終えた私は未だ謎トークを楽しげに展開しているキモオタクコンビをチラ見して、これまた嘆息一つ。ここ数年間、この友人やアイツの所為でストレスの溜まり方が確変しているみたい。

相方こと『新海 愛美』は私の親友。小学校からの腐れ縁で同じ弓道部に所属し、日々切磋琢磨している間柄でもある。しかも彼女は部長。射は私の方が中てるけど。琉依ほど長くはないが、昔馴染みという事もあり私達の内情をある程度知っている数少ない人間だ。美少女然とした、ものすごく可愛らしい名前とフワフワ系の容姿に反して、楽しい事大好きなあつけらかなとしたケセラセラキャラの彼女。名字と名前の両方に『み』が入っている事から、小学生の頃に誰かが付けた『ミミ』という渾名が今でも通称になってしまっているのだ。

昔は恋愛なんて面倒くさくて面白くない、なんて言ってた彼女にも、豹変する瞬間が訪れるようになった。それは……

「よっす、いつもながらカオスなトーク繰り広げてんなー、オタクンビ。朝から空気が澱んでんぞ」

「おおwww藤堂氏www椅子を使わせてもらっているでござるwww今空ける故、しばし待たれい(ビシッwww)」

「おう秋臣。今日は珍しく結構早いな。雨でも降るかね？」

琉依が座っていた片瀬の前の席の本来の所有者、『藤堂 秋臣』の登場。あのキモオタクコンビにちょっかいを出すクラスでも稀有な存在だけど、それはどうも個人的な利害が一致している為であるっぽい。

顔・成績・運動神経共に至って普通の特筆すべき点が見当たらないこの藤堂。あるとすれば割と家族思いだという噂と、あの隔離指

定人物共の相手を臆する事無く出来る点くらいか。同レベルでのキモオタクを展開している所は見た事ないけど、何か妙にウマが合う感じは見受けられる。

因みにこの藤堂、何処かで何かの作品の主人公だったりした事があつたらしいけど……それはまた別のお話。『だから何で突然そんな中途半端な所を……』『だから時系列的に有り得ないだろ』『だからそれならメーティを出せと何度』と言ったツツコミは受け付けませんので悪しからず。

「うつせえ。オヤジが今日から出張で朝の支度させられてたんだよ。その影響で早起きしすぎちゃった。……ところで信一、例のブツ手に入ったか？」

「おう、アレな。手に入れるのに苦労したぜー」

「ドウフフｗｗｗｗアレでござるかｗｗｗｗ？ アレでござるかｗｗｗｗ？ フオカヌプｗｗｗｗ拙者にも回して欲しいでござるｗｗｗｗｗｗ」

教室の一角で何やら怪しげな取引をする人間レベル的平均点未満トリオ（普通一人、ダメ人間二人でブツチギリ平均未満）。どんなに非人道的なシロモノであれ内容物を確認すればドン引き確定なので、わざわざ暴いてやる必要もあるまい。そんな行為は精神衛生上不必要だ。射で遠距離攻撃を試みたい所でもあるのだが、そんな事したら矢が穢れそう。

……そんなおどろおどろしい毒の沼地みたいな光景を、何故かキラキラした瞳で見つめる乙女が一人。

「ねえねえ、藤堂くんってカッコ良くない？」

私の相方、美少女新海さんが理解不能な台詞を吐いて、頬を染め

ていた。昔から結構モテる癖に、どうしてこうなっちゃったのか。恋愛なんて面倒くさくて面白くないのではなかったのか。世の中って分からない。

「はあ？ どう鼻屑目に見たって普通でしょ？ 自分でもそう認めてるし。アンタ目がオカシイんじゃないの？」

「そんな事ないってえ〜 絶対カツコイイよお〜 よしっ、今日は部活も早く終わるし、一緒に下校出来るように誘ってみるっ！ あたし、頑張るよお〜！！」

「……………」

……………これは誰だ。こんな甘ったるい声を出す親友は知らない。何でこう、私の昔馴染みは人格変貌が激しいんだろうか。昔は皆可愛かったのに。世の中って理不尽。はあ、と溜め息一つ。色々と物申したい所ではあるが、人の恋路を邪魔するほど野暮ではないつもりだ。私に迷惑をぶん投げて来ない程度なら好きにすればいい。

私は快晴の青空に目を眩ませつつ、再び大きな溜め息を吐き出した

「……………ね、ねえ、藤堂くん」

「あー？ 何だ、新海か。どうした、オレに用事なんて珍しいな」

【揺らぎ昂る「コンセン」トレーション】

「……………」

ヒュンッ カッ

放課後。風を薙ぐ感触が頬を撫でる。部活に参加している私は、一心不乱……………とは少しニュアンスが違う気がするけど、それに似たような感覚で弓を引き続けていた。

「……………」

ヒュンッ カッ

的を見据えて、弓を引き、撃ち放って矢の行方を見守る。一定のリズムで同じ動作を繰り返す。弓は最早私の一部だ。そこに淀みなどある訳がない。……………いや、むしろ私が弓の一部になってしまっているような気さえする。上手く引けるならどちらでも構わないが。

「……………」

ヒュンッ カッ

「おい……………今日の桜木先輩、何か変じゃね?」「ああ、心ここに在らずって感じだな……………」^{あて}「その割に的中率がハンパねーけど……………」
「うん、今の所全部中てる」「スゴすぎだよ、桜木先輩……………」
「相変わらず綺麗な射よねえ……………惚れ惚れしちゃうわ」

雑音が耳に入らない。自己に埋没し過ぎると外界とは別次元に精神が隔離されてしまうのか、バカの一つ覚えみたいに機械じみた動きで身体が射だけを繰り返していた。

「……………」

ヒュンッ カッ

的に浮かぶ顔。幼馴染の顔。神経を逆撫でし、心を粟立たせるキラいな丸い顔。僅かに残る昔の面影が、より一層憎々さを引き立てる。

ギリ、と音を立てたのは矢を番^つえる弦か、それとも私の歯か。ザワザワと鳴動する夜の森のように、昏く深く閉ざされて行く。

「……………」

ヒュンッ カッ

……………私は琉依にどうして欲しいのだろう。琉依がどうなって欲しいのだろう。昔の、私が好きだった頃の琉依に戻って欲しいとは思う。それが最上の願い。あの頃の琉依と今の琉依では全くの別人だ。あんな琉依は見えていたくないし、到底許せる範囲のものではない。琉依だって、今のカツコ悪いオタクな自分よりも昔の輝いていた頃の自分の方がいいと思っっているに決まっている。

「……………」

ヒュンッ カッ

でもそれって……私の一方的な願望でしかない。確かにケガをしてもうバスケが出来なくなっただという事情はある。が、今の自分を形作ったのはあくまで琉依本人だ。そこにどのような葛藤があったのか、苦悩があったのかは琉依本人にしか分からない。私が思っているのは、今の琉依を認められない反抗心から来る願望に過ぎない。

「……………」

ヒュンツ カッ

一般論的に言えば、誰からも敬遠されるオタクな今よりも皆に好かれていたスポーツマンな昔の方が良いと思うのは当然の事だろう。誰だって、嫌われるより好かれたいのは当たり前で悪い事じゃない。……けど、それはあくまで一般論。そうは思わない人もいれば、自分のなりたい自分になれない人だって世の中にはいっぱいいる。簡単に変わるなら誰だって苦労なんかしない。

「……………」

ヒュンツ カッ

なら……私は？ 私はあの頃と変わっていない、あの頃理想としていた自分に成れていると、胸を張って言えるのか？ 変わってしまった友人達を蔑んで『昔はこうじゃなかったのに』と嘆く私は、本当に自分だけは昔のままだと、自分だけは改悪していないと言い切ってしまうっていいのか？

「……………」

ヒュンツ カッ

違う。私は違う。私は琉依とは違う。今だってこうして、明後日に迫った大会に向けての練習を積んでいる。高校卒業した後も弓道続けるかどうかは決めていないけど、次の大会は高校最後だ。ここでベストを尽くせなければ絶対に一生後悔する。

「……………」

ヒュンツ カツ パキツ

…………… そうだ、私には弓道がある。私が私である為の大きな因子。弓を引いている私は紛れもなく『桜木梨羽』だ。8年、数え切れない程の回数と時間を積み重ね、色んな人に認められるくらいには成長した弓道家としての私。それは唯一無二のアイデンティティ。それを失くす事は私自身が選んで歩んで来た道のりを否定する事に他ならない。私は琉依とは違う。バスケを失くしてしまった琉依とは違う。…………… 違う。

「……………」

ヒュンツ……………

「……………？」

ふと、今までとの感触の違いに違和感を覚えて我に返る。目に映るのは二十本以上矢が刺さって最早体裁を成していない的と、的に届きさえせず芝生に転がっている矢が一本だけ。どうやら今の一射は打ち損なっただけ。…………… あれ、緩んじやっただけかな？ 少し集中を欠いていたみたいだ。反省反省。

「……ちよつと、この指どつしたのよ梨羽!？」

「……………え?」

射位に戻ろうとする私を部長のミミが血相変えて呼び止める。ああ、いたんだ、ミミ。声が大きいなあ。藤堂とは上手く行ったの?

「え? じゃないわよ! 何呆けてんの! この指は痛くないのかつて訊いてるのよ!！」

ミミが私の右手を掴み上げる。そこには……

私の指を真紅に染め上げる、奇妙な赤い液体が付着していた

「え? ……え?」

「中島クン、救急箱持って来て!! 大至急!!」「は、はい!!」「それより保健室に連れて行った方がいいんじゃない?」「うわつ、スゲー血が出てますよ先輩!!」「何でアンタは弓懸も着けずに弓引いてんのよ!! これじゃ爪割れて当たり前でしょ!?!」「……………どうしよう、桜木先輩が抜けたらウチの部、勝てっこないよお」「バカつ! 今は大会の事なんて考えちゃダメだよ!!！」

部員達が慌ただしく私の周りを走り回る。……………え、ちよ……………ちよつと待ってよ……………。私が抜けるって何の話? 皆何をそんなに焦っているの? だってこんなの痛くも痒くも……………ちよつと手が汚れち

やっただけで……………

ワタシハ、マダイクラデモ、ユミヲヒケルツテバ……………

「とにかく、保健室に連れて行くから。ほら、ポケっとしてないでちゃんと着いて来て!!」

思考が追いついて来ないまま私は弓を取り上げられ、ニミニ引き摺られるようにして弓道場を後にした

【零れ砕けるメンタリテイ】

「特に大きなケガではないわ。下手に構わなければ数日で痛みも引くし、爪が生え変われば傷もキレイサツパリ消える。……でも明後日の大会は無理ね。少なくとも一週間は弓を引いちゃダメ」

「……………」

連れて来られた保健室。目の前に座る、確か『あてや艶夜』とか言う名前の女医は手早く処置を終えた後、私にそんな事を告げた。

……この人が何故こんな事を言うのか分からない。こんなのは大したケガではない。包帯でぐるぐる巻きにされているでもなく、ケガをした右手親指を消毒し軟膏を塗ってガーゼをテープで固定してあるだけ。痛みだって殆ど無いし、今は血すら滲んでもいない。なら……大会は出られる筈だ。

「……………待って下さい。この程度ならやれます。ほら、全然痛くならないし」

私は右手を振って笑顔を見せる。一瞬チクリと痛みが走るが、そんなものは無視だ。

「ダメだと言っていているでしょう。今無理をしたら傷の治りが遅くなるわよ。確かに今後二度と弓を持ってなくなるような大ケガではないけど、そんなまともな力の入らない指でまともな成績を修める事なんて出来ると思っているの？ ただでさえ弓道は繊細な力加減が要求されるというのに」

「……………」

保険医の言葉は正論だ。正論だからこそ、救いがない。何しろ……次の大会は高校最後なのだ。これに出なければ今まで積み重ねてきたものが全て瓦解すると言っても過言ではないのだから。なのに保険医は出るなと言う。私の努力を全て無に帰そうと辛辣な言葉を投げ掛ける。

頭の中を絶望感と焦燥感が入り混じって駆け巡り、それは今まで積み上げて来たものが崩れ落ちた所に堆積して精神を圧迫する。爪先から少しずつ力が抜けて、気付けば私は床に尻餅をついていた。保険医も付き添っていたミミも、居辛そうに目を伏せる。……憐みや同情なんか欲しくない。ないのに……。

積み上がり切った絶望感の頂に、何故かアイツの顔が浮かぶ。……ああそうか、今の私ってあの時の、中学最後の大会前にケガをしてバスケが出来なくなった琉依と殆ど同じ状況なんだ。悔しさと切なさが涙となって零れ落ちる。

……でもお陰で、少しでも琉依の気持ちがあった気がする。安易な憐憫や同情は慰めにもならないし、逃げたくなるのも理解出来る。そして同時に気付かされた。……今まで自分が、どれほど琉依を見下していたのかを。

「……………ごめんミミ、今日はもう帰るね。練習出来ないなら居たって仕方ないし」

私は力の入らない足を無理やり立たせて、ヨロヨロと出口に向かう。

「梨羽……………元気、出してね。付いて行かなくて大丈夫？」

「うん、大丈夫。ありがとね。……でもちょっと一人にしてくれる？」

「あつ、うん、ゴメン。じゃあ私は道場に戻るから。……あんまり思い詰めちゃダメよ？」

「分かってる。心配しないで。……それじゃあね」

結局一度も振り返らずに、私は保健室を後にした

「あ、いたいた林原。ちょっといい？」

「おおwww新海嬢でござるかwww拙者に用とは随分と珍妙なwww明日は豪雨でござろうwww」

「えーっと……と、藤堂くんは……？」

「藤堂氏ならば帰宅召されたでござるwww何やら事情も分からぬ不思議そうな表情をしておったでござるがなwww拙者ではなく藤堂氏に用だったでござるかwww？ 又ポオwww」

「そ、そう……って、用事はそつちじゃなくて……えっと、アンタ梨羽の近所でしょ？ 悪いんだけど、梨羽の荷物を家に届けてやって欲しいのよ」

「オウフｗｗｗｗ梨羽殿がどうかしたでござるかｗｗｗｗ？ ケンカでござるかｗｗｗｗ？ ケンカでござるかｗｗｗｗ？ ケンカでござるかｗｗｗｗ？ 他人の修羅場はメシウマでござるｗｗｗｗｗｗ」

「……アンタ相変わらず得な性格してるね……。ケンカじゃなくて、ケガよケガ。梨羽、部活中にケガしちゃってね。……明後日の大会にも出れなくなっちゃったんだ」

「ｗｗｗｗ……。マジ？」

「マジ、よ。あのコは部で一番中てるから、部長としては冗談であつて欲しかったんだけど……。あ、でも心配しないで。ケガ自体は大した事はないから。ちよつと箇所が悪かっただけ。てか自業自得ね。弓懸も着けずにあんな無謀な射を繰り返してたんだから。爪くらい割れて当然というか何というか、むしろ爪程度で済んで良かったというか。弓弾いた時の衝撃って結構凄いから、下手すると指の骨が折れちゃったりするんだけどね」

「……………」

「あたしはそつとしておく事しか出来ないけれど……。アンタからは言える事があるんじゃない？ アンタが本当に『林原琉依』であるのなら、ね」

「……………」

「それじゃ、あの口を宜しくね、『幼馴染』くん」

「……………」
『幼馴染』、か
「

【在りし過去とのエンカウント】

「おい！ 誰か早く監督呼んで来い！！」

あれは忘れもしない3年前の夏の日、サウナのように蒸し暑い体育館での出来事。オレは夢が碎ける音を聴いた

疲労性剥離骨折。

そんな言葉が耳に入って来たのはそれから数時間後の、病院の一室だった。その間の記憶はない。試合形式の練習でハーフライン手前でパスを受け、一人目をクイックフェイントで置き去りにし、二人目をターンでかわし、壁パスを受け、三人目をシュートフェイクで抜き去り、完璧な体勢でシュートモーションに入った所までは覚えていた。だがそれから後の、あの奇妙な音が聴こえた瞬間から診察室で聞き慣れない単語を耳にするまでの数時間は消しゴムを掛けたようにキレイさっぱり抜け落ちている。

予兆はあった。練習中、右肘に軋むような痛みが走るのはさほど珍しい事ではなかったが、そんな痛みに構ってられなかったのと認めなくなかったのが半々。結果、限界を超えてしまった。……まさかよりによつて他でもない自分の身体が自分の努力を裏切ってくれようとは。

確かに幼い頃からろくなコーチも付けず、ボールを追い駆けていたオレのシュートフォームは肘の使い方に独特な癖があったらしい。だがそれでも入ってしまうのだから仕方がない。上手く撃てないのなら改善の余地もあっただろうに、オレはどうやら他の人よりも少し才能があつたらしく、自分のシュートフォームに疑いを抱かなか

った。

骨折自体はそう重いものじゃないらしい。ただし問題なのはそこじゃなかった。剥離骨折というのは骨が密接する筋肉や腱から剥がれる、文字通り『剥離』する事で起こる。通常なら軽くて全治3ヶ月と言った所だ。……だがオレのそれは普通とは少し違って、骨が剥離した際に僅か数センチの欠片が発生。そいつが運悪く肘関節の神経を傷つけやがった。この所為でオレの右肘はもう今まで通りの動きが出来なくなった。

今でこそ日常生活に支障ないレベルまでは使えるようになったものの、ちよつとした荷物を持ち上げる時や腕を頭上に伸ばす時なんかは痺れや鈍痛が走る。当時で言えば、指一つ動かすのさえままならない。そんな状態でバスケットなんて夢のまた夢だ。バスケットをにつき込んで来たオレにとつて、死刑宣告も同様。あの時壊れたのは骨なんかじゃなく、オレの夢そのものだった。

それからのオレは……まあ想像に難くないだろう。自暴自棄になつて荒れに荒れて、今思い返してもバカな事ばかりやっていた。両親や友達、梨羽にも散々迷惑を掛けた。そりゃあ梨羽だってオレと関わるのは避けるだろう。

……実の所、少しでも梨羽に励まして貰えば、なんて情けない事を心の何処かで考えていたりもした。梨羽ならオレを元氣付けてくれるだろう、なんて自分勝手な淡い期待を抱いていた。……しかし実際は、会話らしい会話なんて殆どなかった。たまに会つても妙によそよそしく、目だけが憐れみを伝えて来る。そんな梨羽の視線や態度がオレの精神を粟立たせ、苛立ちや自閉に拍車を掛けた。……いや、他人の所為にするのは良くないな。それはオレが弱かった、バカだっただけの話だ。梨羽に責任なんて一欠片もない。

暴れ散らすのも飽きた頃、オレは何気なくTVでやっていたとある番組に心を奪われる。それはオレが今までバカにしていた、所謂オタク御用達の『アニメ』だった。小さなTVの中で展開する、色

鮮やかな世界。個性的なキャラクター達が共に協力し困難に立ち向かい、時に笑い、時に悩み、そしてくすぐったいような恋をする。空っぽだったオレには、その全てがたまらなく輝いて見えた。

それからアニメやラノベ、マンガにのめり込んだオレはまるで憑き物でも落ちたかのように、落ち着きを取り戻し穏やかな性格になった。……まあ、梨羽や周りからは『染まり過ぎ』との声もあるが、オレはこのアニメや二次元に囲まれた今が楽しくて仕方がない。話の合う友人もいるし、あの黒歴史のように意味もなく苛ついたり常にストレスを貯めていたりする事もない。アニメに出会えて、オレは救われたんだと言っても過言ではないだろう。

……そう、こんな経験をしているオレだからこそ、今の梨羽は放つては置けない。今はどうであれ、オレは結局の所ケガを理由にバスケから逃げたんだ。あそこで腐らずにハビリに尽力して、バスケを諦めなかったらまた別の人生があっただろう。だがしかし、周りから見たら今のオレは立派な爪弾き者だ。落伍者と言い換えてもいい。確かに後悔はしていないし納得もしているが、梨羽にオレと同じ道を辿って欲しいかと言えばそれは断じてNOだ。

梨羽は真面目で人望も才能もある。それが潰れてしまうのが勿体ないと思うかどうかは梨羽次第だし俺がどうこう言えた事ではないが、梨羽は強く見えて意外と脆い。最後の大会に出られなくなってしまったという今回の件で立ち直れなくなる可能性は、オレの見立てではかなり高いように思う。それも時間の問題だろう。

……こんなオレが果たしてどの程度の事をしてやれるのか、全然分からないし自信もない。だがオレにしか言えない事、オレだけにしか分からない事はきつとある。……新海に諭されたってのは少し情けないが、梨羽がピンチの今、形振りなんて構っていられない。

……そう、何故ならオレ達は『幼馴染』なんだから

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4563p/>

幼馴染.....それは綺羅びやかな出逢いと雅で甘美な思い出に染められた大切に

2011年11月21日20時06分発行